

Title	ネルヴァネルと劇評
Sub Title	Nerval et les critiques théâtrales
Author	比気, 千晶(Hiki, Chiaki)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2010
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.15, (2010.) ,p.1- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20101201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ネルヴァルと劇評

比気 千晶

1835年5月、ジェラルールとアナートル・ブーシャルディーは「演劇界」を創刊するが、まもなく赤字を抱え、ジェラルールは、1834年に相続した母方の祖父の遺産を使い果たしてしまう。そして、1836年6月16日には「演劇界」の創刊者である二人に破産宣告が下される。多額の借金を抱えることになったジェラルールは、この後、新聞雑誌に大量の記事を書かざるを得ない状況に追い込まれる。今回の分析対象である「プレス」誌の記事は、このような経済状況のもとに書かれた劇評である。

ところで、ジェラルールの劇評に関する研究として以下を挙げることができる。まずは、19世紀に刊行されていた雑誌から、丹念にジェラルールの記事を探し出し、文献学的に分析したミシェル・ブリックスによる『ジェラルール・ジャーナリスト』（1986）。また、1989年から1993年にかけて刊行されたプレイヤッド版では、これまでのプレイヤッド版とは異なり、疑わしい記事は取り除かれ、ジェラルール本人が書いたとの確証が強い記事のみが掲載されている。

このプレイヤッド版が刊行されることにより、ジェラルールが寄稿した雑誌記事を以前より容易に研究することが可能となった。しかしながら、ジャック・ボニーやミシェル・ブリックスが指摘するように、これらの研究は十分であるとは言えない¹。ジェラルールの主要作品と演劇との関係は多くの研究者が着目してはいるが、ジェラルールの劇評そのものの分析は未だになおざりにされたままのように思われる。

そこで、本研究は、三巻本のプレイヤッド版のうちの700ページを占め

¹ BONNY (Jaques), *Aspects de Nerval*, Eurédit, paris, 2006, p. 49. BRIX (Michel), *Nerval Journaliste*, Presses Universitaire de Namur, Namur, 1989, pp. 1-4.

る劇評の記事の中で、ジェラルールが「プレス」誌に初めて寄稿した 1837 年代の記事を中心に、歴史的背景を考慮しながら分析を行うものである。まずは、1837 年の「プレス」誌の劇評をゴーチエと分担するにあたって、どのようにして二人は記事を分担したのかを二人のジャンルへの好みを考察しながら明らかにしていく。次に、1837 年に始めて「プレス」誌に掲載されたジェラルールの 7 月 17 日（月）の記事を中心に、当時の一般的な劇評とは異なるジェラルールの記事を分析する。そして、当時に至るロマン派劇やモラル劇の扱われ方を確認し、ロマン派劇を支持するジェラルールがなぜ、モラル劇を批判するのかを検討する。

1837 年の「プレス」誌におけるゴーチエとの劇評の分担²

「プレス」誌は、エミール・ド・ジラルダンによって 1836 年 7 月 1 日に創刊された日刊紙である。ネルヴァルと名乗る以前のジェラルールとゴーチエ

² 劇評を分析するに際して、当時の劇場の状況を知る必要がある。19 世紀の劇場の様子に関しては、GENGEMBRE (Gérard), *Le Théâtre français au 19^e siècle*, Armand Colin, 1999 や LAPLACE-CLAVERIE (Hélène) (sous la dir.de), *Le Théâtre français du XIX^e siècle, L'avant-scène théâtre*, 2008 に詳しい。

当時の劇場の様子について簡単に述べると、それぞれの劇場には格付けがあり、上演される劇のジャンルが決まっていた。オペラ座は、最も威信のあるオペラが専門の劇場である。オペラ・コミック座は、歌の他に台詞のある、オペラの次に威信のあるオペラ・コミックの劇場である。そして、テアトル・フランセは、台詞だけで構成された、特に韻文で書かれ五幕の劇を専門とした劇場であり、モリエール、ラシーヌ、コルネイユ、ヴォルテールなどの劇を保存するという役目も担っていた。以上は、政府から助成金によって運営されていた劇場である。

一方、助成金を受けた劇場の他に、助成金を受けていない格下の劇場が存在していた。ヴォードヴィル座、ヴァリエテ座、ジムナーズ座といった劇場は、主にヴォードヴィルの上演を行っている劇場である。また、より格の低い劇場であるゲテ座やアンビギュ・コミック座は、メロドラマを中心に上演する劇場である。ポルト・サン・マルタン座では、悲劇、ヴォードヴィル、喜劇、バレエ、メロドラマ、ロマン派劇といった様々なジャンルの劇が上演されていた。

は、ジラルダンの要請により、アレクサンドル・デュマと劇作家であるフレデリック・スリエによって担当されていた劇評を引き継ぐことになる³。ジェラルールとゴーチエの二人の劇評は、1837年7月17日のジェラルールの記事から開始され、7月24日はゴーチエ、7月30-31日はジェラルール、8月8日はゴーチエ、8月14日はジェラルールと、8月14日までは、ジェラルールとゴーチエによって交互に執筆されることになる。その後は、10月29日のデュマによる記事を除けば、ゴーチエの単独記事と、ゴーチエとジェラルールの二人によって書かれたとされている G.G.の記事が、ほぼ交互に掲載されることになる。

では、二人はいかにして記事を分担したのであろうか。ゴーチエの書いた『演劇の歴史』を紐解くと、ゴーチエは、散文で書かれたドラマや、二流劇 (théâtre secondaire) であるメロドラマやヴォードヴィルよりも、サーカスや音楽、オペラを好んでいたということが明らかのように思われる。例えば、シルク・オランピック (Cirque-Olympique) で聞こえる「オップ (hop)」と「ラ (la)」のみで構成される対話は、「メロドラマの主人公の荒れ狂った饒舌やヴォードヴィル座の猥談、テアトル・フランセの持って回った言葉より良いのではないか⁴」と述べている。また、日常語 (散文) を使い日常を上演するドラマと異なり、オペラは、「音楽によって散文から免れ」、「日常を軽蔑する」ため、ゴーチエにとって魅力的なものとなるのである⁵。

一方でジェラルールは、音楽を好んで取り上げたゴーチエとは異なり、音楽批評に対し苦手意識を持っていたように思われる。作曲家であり、音楽評論家であるアントワーヌ・エルヴァーに宛てた 1838年3月24日の手紙には、「プレス」誌に3段か4段分、音楽のことを代わりに書いてほしいと

³ バレ＝ロワイヤル座支配人宛の 1837年7月付の手紙には、「プレス」誌の劇評をジェラルールとゴーチエの共同で行うことになったので、二人の名前を優待入場者の名簿に登録してほしいという要望が書かれている。

⁴ GAUTIER (Théophile), *Histoire de l'art dramatique en France depuis vingt-cinq ans*, Slatkine Reprints, Genève, 1968, pp. 11-12.

⁵ GAUTIER, *op. cit.*, pp. 15-17.

頼んでいるのである⁶。しかしながら、二流劇に関しては、同じような筋の劇が繰り返し上演されていると認識しつつも⁷、ゴーチエのように劇評を書くことに対する消極的な姿勢を文章の中で示すことはなかった⁸。それ以上に、スリエや劇作家であったイポリット・オジェが、二流劇の一つとされているヴォードヴィルの価値を否定していたのに対し⁹、その文学的価値を否定せず、「ヴォードヴィルを全く真面目に取り扱わないのは、現代批評の過ちである」と、述べているのである¹⁰。

そして、何よりも、ジェラルールは、読者が期待するものを書こうとしていた。例えば、「演劇界」に寄稿されたジェラルールが書いたとされる G.の記事では、劇場を、オペラやオペラ・コミックが上演される歌劇場 (Les théâtres lyriques)、その他の国営の劇場とポルト・サン・マルタン (les Français et la Porte-Saint-Martin)、私設劇場であるヴォードヴィルやメロドラマの劇場 (les théâtres de vaudevilles et mélodrames) の三つに分け、この中で劇評の王となるのは、最も読者の興味を引くことができる三番目のヴォードヴィルやメ

⁶ NERVAL (Gérard de), *Œuvres complètes*, I, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1989, p. 1304. 以下 *O.C.I* と略し、引用文には拙訳を試みた。

⁷ GAUTIER, *op. cit.*, p. 51. など。

⁸ ゴーチエはたびたび、劇評の中で、劇の要約を書くとは無駄であると述べていた。GAUTIER, *op. cit.*, p. 15.

⁹ 1836年7月12日に「プレス」誌に掲載されたスリエの記事によれば、下水と同一視されるヴォードヴィルは、民衆の美的感覚を腐らせ、高尚な精神をゆがめる、劇文学の中の傷として扱われている。

また、1839年に出版された『演劇の生理学』の中で、オジェは、過去と現在のヴォードヴィルを比較し、かつてのヴォードヴィルは、フランス特有のポエジーのあるもので、才気を強調し、滑稽さを暴き、風俗をただすのに最も適したものであったが、現在では、有害で不道徳なものに影響され、人々は心の中に、エゴイズムや偽善を生み出してしまおうと言う。AUGER (Hippolyte), *Physiologie du théâtre*, Librairie de Firmin Didot frères, Paris, 1839, p. 33.

¹⁰ *O.C.I*, p. 357.

ロドラマの劇場であると述べているのである¹¹。

では、このような二人のジャンルへの傾向が、「プレス」誌の劇評を分担する際にも反映されていたのだろうか。1837年に「プレス」誌で批評された劇のジャンルと劇評に記された署名を調べると、ゴーチエの単独記事が、サーカスやルイ王朝期のオペラ座である王立音楽アカデミーの記事が多いのに対し、ジェラルルの書く記事は、主にドラマやヴォードヴィルの記事が多い。そして、G.G.の署名のある記事では、以上のようなジャンルの偏りは見られない。よって、二人は、自らが得意とするジャンルを中心に劇評を書いていたと考えられるのではないだろうか。

記事の掲載日

以上の「プレス」誌の劇評の分担に関する考察から、ジェラルルには、主に、メロドラマやヴォードヴィルの批評が任されていたと考えられる。では、次にジェラルルの書く記事の特徴を、他の雑誌と比較しながら明らかにしていきたい。

まずは、「プレス」誌に掲載された記事の特徴を把握するために、1837年に刊行されていた日刊紙である「コンスティテュシヨネル」誌、「デバ」誌の劇評の状況について調べた。その結果、C.とY.によって担当されていた「コンスティテュシヨネル」誌の劇評は、ほぼ毎週月曜日に掲載されていた。ジャンンによって担当されていた「デバ」誌も、基本的には月曜日に発表されているが、劇評が掲載されていない週もあった。そして、二つの雑誌は、同じ日に、ほぼ同じ劇の批評を掲載していたのである。

では、なぜ同じ日に、同じ劇の批評を載せるのだろうか。当時は、新しく上演された劇を批評すること、特に初演の劇を批評することが重要であると考えられていた。「演劇界」誌のG.は、以下のように嘆く。

三つの劇の初演が同じ日の夜に行われる。どうしたらよいのだろうか。どれを選べばいいのか。どのようにして三つの劇の要約を書けばよいのだ

¹¹ *Le Monde dramatique*, Tome I, 1835, p. 423.

ろうか。というのも、読者が望むのは初演の記事であり、二回目に上演されたものではないからだ¹²。

当時の劇場は、一般に、6時から7時の間に劇の上演を開始していたため、初演が重なるときには、見に行く劇を選ばなければならなかった。ジャンンは、このような状況を打破するために特別な箱馬車を持ち、幕間の時間などを利用して劇場間を行き来していたと言われている¹³。以上のことを踏まえると、劇評には、新しく演じられる劇をなるべく早く見に行き、なるべく早く掲載するという傾向があったと言えるだろう。そう考えると、「コンスティテュショナル」と「デバ」の劇評が同じ日に、同じ劇を批評していたことも納得がいくように思われるのである。

では、ジェラルムも、このように新しく上演された劇の劇評をなるべく早く掲載していたのだろうか。8月14日(月)付の記事の内容は、「コンスティテュショナル」や「デバ」が取り上げる劇とほぼ変わらない。しかしながら、7月17日(月)と30-31日(月)付の記事の内容は、上記の2つの新聞記事と比較すると、7月17日(月)付の記事は内容がかなり遅れたものであり、30-31日付の記事は、その内容が一週間分遅れていることが明らかである。より具体的には、7月17日(月)の「プレス」誌でジェラルムが言及しているのは、『女性の忠告 (*Les Conseils des Femmes*)』、『代訴人とノルマンディー人 (*L'Avoué et le Normand*)』、『ローマの学生 (*L'Élève de Rome*)』、『ミナ (*Mina ou la Fille du Bourgmestre*)』、『望めばできる (*Vouloir, C'est Pouvoir*)』、『ポルト・レスペ (*Porte-Respect*)』、『ボエッシュとガリマフレ (*Bohèche et Galimafre*)』、『リチャード・ムーア (*Richard Moor*)』の8つである。ほぼ毎週月曜日に必ず劇評が掲載される「コンスティテュショナル」と比較すると、以上にあげた8つの劇の劇評は、6月12日(月)か

¹² *Le Monde dramatique*, TomeI, 1835, p. 423.

¹³ *Le Monde dramatique*, TomeI, 1835, p. 423. また、当時の批評家の様子は、DESCOTES (Maurice), *Histoire de la critique dramatique en France*, Gunter Narr Verlag, Paris, 1980, pp. 207-280 に詳しい。

ら7月10日（月）の間に掲載されたものであり、ジェラルルの記事の内容が遅れているのは明らかである。同様に、ジェラルルが7月30-31日に「プレス」誌に取り上げた劇も、『子供の父親（*Le Père de l'Enfant*）』を除けば、「コンスティテュショナル」や「デバ」に7月24日に掲載されたものである。

ではなぜ、ジェラルルは他紙よりも遅れた記事を掲載したのだろうか。その理由は定かではない。しかしながら、7月17日付の記事は、ジェラルルがこの遅れを意識しながら書いていたことが明らかである。

7月17日付の記事においてジェラルルは、以下のように劇評を書き始める。「私たちは、ずいぶん遅れを前にしている。後に、演劇が取り入れていくだろう半ドラマ的な話を、「プレス」誌が予約購読者に語っていた間に、ドラマやヴォードヴィルは人知れず、積み上げられていったのだ¹⁴。実際、この劇評が掲載される前の「プレス」誌の劇評は、デュマによって書かれた7月4日の記事である。よって、ジェラルルは、この「遅れ」を利用しながら記事を書くことになるのだ。そして、ジェラルルは続ける。「ここには、息絶え絶えの劇が二つあり、それらは、追想、花輪、十字架を私たちに要求しているのだ¹⁵」。ここで、ジェラルルは、彼が劇評を書くまでに、すでに打ち切れそうな劇があることを暗示している。このようにして、ジェラルルは、劇評の掲載が遅れたために知ることのできる、個々の劇の状況を文章の中に組み込むことができたのである。

例えば、『ボエッシュとガリマフレ』を紹介するとき、「2週間にわたり大成功を収めている」と述べている。また、『ポルト・レスペ』に関しては、この劇がヴァリエテ座で上演された唯一の新しい劇なのだと嫌みを言う。実際、『ボエッシュとガリマフレ』は、7月3日（月）から、『ポルト・レスペ』は6月21日（土）から上演されたものである。以上より、ジェラルルは、上演されてから、2週間後、3週間後の劇の様子を劇評に加えているのである。

¹⁴ *O.C.I.*, p. 355.

¹⁵ *O.C.I.*, p. 355.

また、新聞に劇評が長い間掲載されなかった場合、掲載される前に始まり、そして打ち切られてしまう劇も存在する。今回の劇評では、『女の忠告』がその例である。この劇についてジェラルールは以下のように述べる。「ジムナーズから始めよう。我々は、率直に言えば、ジムナーズ座の三つの劇に生きているという証明書を与えたかった。しかしながら、ジムナーズ座が自ら、『女の忠告』を禁止 (condamné) してしまった」。「デバ」誌をさかのぼり調べると、『女の忠告』は、7月15日以降上演されていない。つまり、この劇をジムナーズが打ち切ったため、ジェラルールは生きているという証明書を与えることができなかつたと述べているように思われる¹⁶。そして、劇は打ち切られてしまったにもかかわらず、ジェラルールは、この劇に関する劇評を書いているのである。

ロマン派劇への支持

ジェラルールとゴーチエによって執筆された「プレス」誌の劇評を読むと、モラル (morale) という言葉が何度も繰り返されることに気がつくだろう。特に、ジェラルールによって書かれた1837年7月14日および30-31日付の記事はモラルという言葉が劇を評する際に重要な要素となっているといえる。これらの記事を理解するために、まずは、この言葉がどのような文脈の中で利用されているのかを知る必要があると考えられる。

そもそも、演劇の役割とは何であろうか。周知のように、モリエールは、演劇の義務とは、人々を楽しませながら正すことであると述べた。その後、19世紀初頭においても、劇は17世紀と同じ役割を担っていた。1789年のフランス革命時の動乱によって、人々は、モラルや宗教の価値を見失ってしまうが、このような状況の中で、劇、特にメロドラマは、人々に再び道徳を教え、秩序に従うように教化する役割を担っていたのである。

その後、ルイ・フィリップの即位によって、1830年からの5年間、検閲は公式に廃止されることになる。この検閲の廃止に伴って繁栄したのが、不道徳 (immoral) と言われる劇や、反体制を鼓舞する劇であった。このよ

¹⁶ 『女の忠告』は、1837年7月19日より再開されることになる。

うな劇の一つとして数えられていたのが、ロマン派による演劇である。ロマン派劇は、道徳を守り秩序を遵守するブルジョワ社会と真っ向から対立するものだったのである¹⁷。1830年に上演されたユゴーの『エルナニ』を皮切りに、デュマの『アントニー』(1831)、血なまぐさい歴史を描いたユゴーの『ルクレツィア・ボルジア』(1833)や『マリー・チュードル』(1833)といったロマン派劇は、商業的にも成功を取めることになる¹⁸。

しかしながら、1835年7月28日、フェスキの陰謀が起こる。これにより検閲が復活し、違反者は、1ヶ月から1年の禁錮、および1000から5000フランの罰金(現代の価格にして100万~500万円程度)を課されることになった。よって、劇場の支配人は劇の上演に慎重になっていった。劇を上演する前に、劇作家から受け取った原稿は内務省に提出され、検閲を受け、道徳的、社会的、政治的暗示を含む箇所を削るよう指導されたのである。実際、1835年から1841年にかけて、原稿の状態では123の作品が、上演されたものだと11の作品が上演を禁止されている¹⁹。このような状況下で上演数が増えたのは、道徳的ヴォードヴィル(vaudeville moral)、つまり、民衆を教化し、ブルジョワ的価値観を植え付ける劇であった。

では、モラルという言葉キーワードとして、劇評を執筆していたジェラルールは、道徳劇を支持していたのだろうか。そうではない。かつて『エルナニ』の上演を支えたジェラルールは、不道徳であると考えられていたロ

¹⁷ 1838年に、1829年に検閲によって禁止されたユゴーの『マリオン・ド・ロルム』が再演されることになった。この再演を観劇したヴィエネは、この作品の魅力を感じながらも、以下のように述べる。「私はこのような残酷さを受け入れる観客を、愛する人を助けるために裁判官に身を売る観客の妻や娘を理解することはできない。[...] フランス貴族であるロリストン将軍が、私の近くにおいて、劇そのものを見た後でないと、もはや娘を劇に連れてくることもできないと言った。」VIENNET (Jean Pons Guillaume), *Journal de Viennet, Le Livre Contemporain - Amiot-Dumont, Paris, 1955, p. 222.*

¹⁸ ロマン派劇の当時の状況に関しては、LAPLACE-CLAVERIE, *op. cit.*, pp. 138-145が詳しい。

¹⁹ GENGEMBRE, *op. cit.*, p. 23.

マン派劇を支持していたのである。7月30-31日付の「プレス」誌に掲載されたヴォードヴィル、『サンノン! (Sans Nom!)』の劇評を7月24日付の「コンスティテュシヨネル」や「デバ」の劇評と比較すれば明らかのように思われる。

いくつかの劇評を参考にすると、『サンノン!』とは、『アントニー』、『エルナニ』、『ルクレツィア・ボルジア』といったロマン派劇やロマン主義文学をこよなく愛する50代の未婚の女性アンジェルと、同じくロマン派作品を愛するボノム氏が結婚するまでを描いた作品である。ボノム氏 (M.Bonhomme) は、そのブルジョワ的な名字のため、アンジェルを誘惑できずにいる。そこで、アンジェルと結婚するため、ロマン派作家が好んで取り上げそうな、親のいない、過去の分からない謎の男、サンノン (Sans Nom) を演じ、最終的に二人は結ばれるという話である。以上のように、この劇は、ロマン派を揶揄したヴォードヴィルであり、商業的に成功したものであった。

この劇に対して「コンスティテュシヨネル」誌は、かなり好意的な批評を寄せている。この劇のオリジナリティを褒め、はじめから終わりまで、笑い通しだったと述べているのである²⁰。

しかしながら、ジェラルールの意見は「コンスティテュシヨネル」の批評と真っ向から対立するものである。7月24日付の「デバ」誌で、ジャンンは、この『サンノン!』をほめた後、以下のように述べた。「この劇は、あまりにも成功したため、1827年のロマン主義の世間知らずな若者たちを激高させた²¹」。ここで書かれている「1827年のロマン主義の世間知らずな若者」とは、1827年のセナークルに集まった若者達を指す。このセナークルの一員であったジェラルールは、この劇に対して否定的である。「なぜこの劇が成功したのか分からない²²」と不快感をあらわにするのである。

²⁰ *Le Constitutionnel*, 24 juillet, 1837.

²¹ *Le journal des Débats*, 24 juillet, 1837.

²² *O.C.I.*, p. 363.

劇におけるモラルの問題

以上のようにジェラルールは、ロマン派劇を支持していた。その一方で、モラル劇に対して否定的であるのは、彼の書いた劇評を読めば明らかのように思われる。確かに、上演される劇がモラル的であるかそうでないかというのは、劇を見に行く基準、さらには、劇を薦める基準の一つになるだろう²³。しかしながら、何度も繰り返されるモラルという言葉は、モラル劇に対する当てつけの機能を果たしているように思われる。

例えば、モラル劇であるにもかかわらず教訓 (*moralité*) が分かりづらいと、『家族の不幸 (*Le Malheur de la Famille*)』を批判し²⁴、満足のいく教訓を得るのは難しいと『2階と3階 (*Le Troisième et le Quatrième Étage*)』を非難する²⁵。モラルの傾向がはっきりしているにも関わらず成功しない劇もあると、『家族の不幸』に対して嫌みを言い²⁶、さらには、観客さえも持ち出し、『代理人 (*Le Remplaçant*)』の中で繰り返される不道徳は、検閲よりモラルに厳しい観客には耐えることはできないと述べるのである²⁷。

では、なぜ、モラル劇に対してジェラルールは否定的なのだろうか。

ジェラルールにとって、モラルを説く劇は、古典的でオリジナリティがなく、どのような劇も同じようなものであると考えていたようである。『サンノン!』に対するジェラルールの批評を見てみよう。先ほど確認したとおり、ジェラルールは、商業的に成功した『サンノン!』に対して否定的な批評を書いていた。ジェラルールによれば、『サンノン!』が否定的に扱われなければならない理由、それは、何ら新しいものは見あたらず、そのアイデア

²³ ゴーチエは、パレ・ロワイヤルで上演されるモラル劇を揶揄する手段として、この劇を薦める人々の様子を皮肉を込めて語っている。「また工場を舞台にした道徳的ヴォードヴィルだ! [...]母親は娘に、家の主人は使用人に、下級士官は彼らが指揮する国民兵に、管理人は下宿人に、特に、ブルジョワは労働者にパレ・ロワイヤルに行くことを許可できる。」 GAUTIER (Théophile), *op. cit.*, p. 26.

²⁴ *O.C.I*, p. 362.

²⁵ *O.C.I*, p. 365.

²⁶ *O.C.I*, p. 362.

²⁷ *O.C.I*, p. 367.

は、他の劇の焼き増しでしかないからである。

例えば、ジェラルムは、登場人物であるアンジェルについて、当時の小説や当時の詩、当時の劇を読んだために頭が混乱したと紹介した後、以下のように嫌みを言う。「現代のヴォードヴィル、さらにはテオロン氏（『サンノン！』の作者）のヴォードヴィルだけを読んだり見に行ったりした方がよいのではないのだろうか。そこには何一つ、風変わりな（*excentrique*）ことはないのだから²⁸」。つまり、当時、上演された現代ヴォードヴィル（*vaudeville moderne*）とは、モラル劇であるから、それらのみを鑑賞していれば、アンジェルの頭がおかしくなるはずはなかったと、間接的に当時の道徳的ヴォードヴィルの手法の古さを批判しているのである。さらに、ジェラルムは、テオロン氏が、かつては、三単一の法則に打撃を与えた人物であったことを懐かしみながら、「あらゆるヴォードヴィル作家は、年をとると古典主義的になってしまう。彼らは道徳を説き、ラシーヌを崇拜するよう論ずるのだ²⁹」と述べる。つまり、ジェラルムにとって、嘆かわしいこと、それは、古典的劇からロマン派劇へと進化を遂げたにもかかわらず、モラル劇と化すことで再び退化してしまうことなのである。

しかしながら、ジェラルムは、モラル劇に含まれる教訓そのものを否定している訳ではない。ジェラルムが嫌うのは、劇中に教訓が執拗に繰り返されることにより、劇のイリュージョン（*illusion*）が失われてしまうことなのである³⁰。このことは、『若返り』の劇評から明らかである。

『若返り』とは、幻想的ヴォードヴィル（*vaudeville fantastique*）である。複数の劇評を参考にその内容を以下に述べる。中世のドイツを背景に、親や後継者から結婚を反対されている、愛し合う若い男女がいる。老人達を

²⁸ *O.C.I.*, p. 363.

²⁹ *O.C.I.*, p. 363.

³⁰ イリュージョンは、ロマン派劇の中で重要な役割を果たすものであった。デスコットによると、観客がユゴーやデュマのロマン派劇に求めていたのは、普段の生活を忘れさせるイリュージョンであったと言う。DESCOTES, *op. cit.*, p. 246.

説得するため、若者は魔法の粉を使って彼らを若返らせる。老人達は若さを楽しむが、キスをするごとに彼らは5年ずつ年老いてしまう。しかしながら、彼らは若さを保つことよりも楽しむことを優先し、わずかな時間でもとの年齢に戻ってしまう。思い出だけが残った老人達は、「若さは過ぎ去ってしまう」という教訓を学び、先ほどのカップルに結婚を許す、というストーリーである。

この作品は、商業的には成功しなかったようである。ジェラルールは、その理由を、執拗なモラルの繰り返しにあると分析するが、この主張は、「コンスティテュショナル」や「アルチスト」とは異なるものである。

「コンスティテュショナル」は、ゲルマン (*tudesque* (軽蔑的に使われる)) に生まれた幻想と、フランス生まれの狡猾な (*malin*³¹) ヴォードヴィルとを対比させ、もし、成功を望むのであれば、幻想を扱うべきではなかったと作者であるパイヤールに助言する³²。つまり、この劇の敗因は、ヴォードヴィルという「狡猾な」作者が作る劇に、それと相反する幻想を組み込んでしまったことだと考えているのである。「アルチスト」の意見も「コンスティテュショナル」と似たものであり、パイヤールに幻想作品はやめるべきだと述べている³³。

一方で、ジェラルールは、この相反する組み合わせが『若返り』の敗因であるとは考えていない。むしろ、この二つが組み合わせられた劇は、ジェラルールを「喜ばせないわけではない³⁴」のだ。ジェラルールにとってこの劇が成功しなかった理由は、劇の中で執拗に繰り返される教訓にこそある。「残念ながら、教訓が至る所で私たちにつきまとい、後ろから、幻想の羽をもぎに

³¹ ボワローの『詩学』によると、狡猾に生まれたフランス人がヴォードヴィルを作った (*Le Français né malin forma le vaudeville*) という。Boileau, *Art Poétique*, chant II. ヴォードヴィルを語る際に、この「狡猾 (*malin*)」という形容詞がよく利用されることから、当時、流布していた概念のように思われる。

³² *Le Constitutionnel*, 24 juillet, 1837.

³³ *L'Artiste*, Tome XIII, 1837, p. 397.

³⁴ *O.C.I.*, p. 364.

やってくるのだ³⁵」。ジェラルムにとって、否定するべきは、幻想ではなく、執拗なモラルなのである。

では、ジェラルムにとって、モラルとは劇の中でどのような位置を占めるべきだと考えていたのであろうか。彼によれば、モラルとは、劇中で繰り返されるものではなく、読者自身がみずから、引き出すものであると考えていた。ジェラルムは、「今日において、滑稽な役者が真面目に高尚な社会の格言を朗唱し、曲にあわせて道徳を歌うことほど悲しいものはない³⁶」と嘆くのである。

さらに、劇中のモラルは、劇の幻想を壊してしまうばかりではない。ジェラルムによれば、ヴォードヴィルがモラル劇になってしまうことで、ヴォードヴィルはその本来の姿を失い、最後には、ヴォードヴィルというジャンル自体がなくなってしまうと考えているのである。ジェラルムは、本来の姿を失ったヴォードヴィルを強く批判する。

すでに私たちが、機会があるごとに批判してきたのは、気取ったヴォードヴィル、「よくできた」ヴォードヴィル、「善良な」劇であるヴォードヴィル、楽しませる以外の何物かであろうとする二流文学、教訓であろうとする娯楽、叙事詩であろうとする小説、オードの詩句であろうとする歌、できるだけ真面目であろうとするのと同時に、良識のある生真面目な人々の賛同を得ようとする道化芝居である³⁷。

ジェラルムによれば、モラル劇と化したヴォードヴィルは、ヴォードヴィルとは異なるものなのである。そして、このような劇は、「それは、並はずれた真の楽しみにとってだけではなく、真の道徳にとっても害をなす悪癖である³⁸」のだ。もはや、「笑わせることによって習慣を正す³⁹」のではな

³⁵ *O.C.I.*, p. 364.

³⁶ *O.C.I.*, p. 409.

³⁷ *O.C.I.*, p. 407.

³⁸ *O.C.I.*, p. 407.

³⁹ *O.C.I.*, p. 407.

く、「笑わせることなく習慣を正す⁴⁰」ものになってしまうと言い、もし、このことに気をつけなければ、「狡猾に生まれたはずのヴォードヴィルは、間抜けになって死ぬだろう」と、現代のヴォードヴィルの現状を揶揄しながらも、その未来を懸念する。つまり、ヴォードヴィルの極度のモラル化は、そのジャンルを滅亡させてしまう原因となりうると考えているのである。

まとめ

今回の論考では、歴史的背景を考慮しながら、ジェラルールが書いた 1837 年の「プレス」誌の劇評を中心に分析を行った。まずは、1837 年の「プレス」誌の劇評が、ゴーチエ、ジェラルールのそれぞれのジャンルへの好みによって分担されていることを指摘した。次に、始めて「プレス」誌に掲載されたジェラルールの 7 月 17 日（月）の記事を分析し、一般的な劇評とは異なる特徴を挙げた。そして、当時に至るロマン派劇やモラル劇の扱われ方を確認し、ロマン派劇を支持するジェラルールがモラル劇を批判する理由を考察した。

以上より確認できたのは、独創性が乏しく、マンネリズムに陥ったモラル劇に対するジェラルールの嫌悪であり、オリジナリティへの賞賛である。実際に、このようなジェラルールの姿勢は、自らの劇に反映されていたと言えよう⁴¹。本研究は、ジェラルールの劇評の一部分の解釈にとどまった。よって、今後の展開として、1837 年以降の劇評も対象とした、より包括的な分析が望まれる。最終的には、劇評での経験をジェラルールがいかにして自らの劇に反映させたかを調べるのが今後の課題となるであろう。

⁴⁰ *O.C.I.*, p. 407.

⁴¹ ゴーチエは、1837 年のジェラルールの劇『ピキエヨ』を「何物にも似ていない」劇であると賞賛する。GAUTIER, *op. cit.*, p. 60.